

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方針
1 生徒指導の推進	①他人を思いやる優しさや豊かな人間性の育成に努める。	①生徒との面談を実施し、生徒理解を深める。(生徒指導)	面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が80%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が70%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が50%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が50%未満であった。	D	生徒との面談を実施し、生徒理解を深める時間を設けたが、あまり有効ではなかった。(48.3%)	B	各学期始めに面談週間を実施したが、生徒理解を深める時間とはいえなかった。	面接内容や時間の工夫が必要と考えられる。
		②教育相談・特別支援教育の研修を実施する。(生徒指導)	研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が80%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が70%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%未満であった。	A	教育相談・特別支援教育の研修を実施した成果は十分達成できた。(85.6%)			
	②社会のルールや校則を厳守させ、規範意識の向上を図る。	①定期的に服装・頭髪検査を実施する。(生徒指導)	違反者数が0になった。全体で違反者数が10人未満になった。違反者数が前年度とほぼ同数であった。違反者数が前年度より増加した。	C	定期的に服装・頭髪検査を実施したが、違反者は前年度とほぼ同数に近かった。	B	定期的に服装・頭髪検査を実施する事には意味がある。毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い、遅刻者数の減少を目指す事は基本的な生活習慣の確立させる為に必要不可欠である。学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図ることにより、生徒や保護者への説明が可能となる。登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図ることにより、交通事故防止に繋がる。保護者との連携はコロナ禍でできなかった。長期休業中に校外巡視を実施することで、生徒実態が把握できる。補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努めることの重要性を認識することができた。	おおむねできたが、コロナ禍で教職員・PTA・生活安全委員で協力し、計画通りに実施することができなかった。
		②毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い遅刻者数の減少を目指す。(生徒指導)	遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上減少した。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を下回った。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を上回った。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上増加した。	B	毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い、遅刻者数の減少を目指した結果、前年度の遅刻者数を下回った。			
		③学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図る。(生徒指導)	教職員の指導目標に対する達成度が90%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が80%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が50%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が30%以上であった。	A	学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図った結果、達成度が90%以上であった。(100%)			
		④登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図る。(生徒指導)	定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、大きく効果を上げた。定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。不定期ではあるが生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。不定期の実施となり、効果が上がらなかった。	B	登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図った結果、効果を上げた。			
		⑤教職員・PTA・生活安全委員で協力し、交通安全の啓発のための安全指導・交通マナーアップキャンペーンを行う。(生徒指導)	教職員・PTA・生活安全委員で協力し、計画通りに実施することができた。定期的実施することができた。不定期ではあるが、実施することができた。実施することができなかった。	D	教職員・PTA・生活安全委員で協力し、交通安全の啓発のための安全指導・交通マナーアップキャンペーンを行う事ができなかった。			
		⑥長期休業中に校外巡視を実施する。(生徒指導)	年3回以上実施し、問題行動等未然防止に成果をあげた。年2回実施した。年1回実施した。全く実施できなかった。	B	長期休業中に校外巡視を年2回(夏休み・冬休み)実施した。			
		⑦補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努める。(生徒指導)	十分意見交換ができ、生徒指導に活かすことができた。毎月訪問をし、十分な意見交換ができた。毎月訪問したが、十分な意見交換ができなかった。毎月訪問できなかった。	A	補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努めた結果、十分に意見交換ができ、生徒指導に活かすことができた。			
	③生徒理解を深め、個に応じた生徒指導に努める。	①問題行動等を起こした生徒や、良好な学校生活のできていない生徒の保護者に対する面談を実施する。(生徒指導)	保護者と共通理解を図り、生徒に対する支援に成果を上げた。保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果は不十分であった。保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果を上げられなかった。保護者との共通理解を図ることができなかった。	A	問題行動等を起こした生徒や、良好な学校生活のできていない生徒の保護者に対する面談を実施する事ができた。	A	いじめ防止等のためにアンケートを実施して、事前に認知啓発指導できた場合と認知後指導が難しい場合もあった。	人間関係のトラブルから体調不良や基本的な生活習慣を乱してしまう生徒も見受けられた。
		②いじめ防止等のためにアンケートを実施する。(生徒指導)	年2回以上実施し、いじめ等を未然防止に成果をあげた。年2回実施した。年1回実施した。全く実施できなかった。	A	いじめ防止等のためにアンケートを年2回以上実施した。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
2 環境教育・安全教育の推進	①生命を尊重し、心身の健康と安全・感染症予防・防災意識の高揚をはかり、自他の安全を守る能力を育成する。	①心肺蘇生・AED訓練を実施し、応急手当の知識や技術の習得を図る。 (保健環境)	心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が80%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が70%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%未満であった。	A	心肺蘇生に対する意識は高く、これまでの研修が活かされている。	B	生徒の安全を確保するという意識を教職員は持っている。緊急時はすぐに行動に移せるよう準備を整えている。	AEDの設置場所の周知が課題である。周知方法を改善し、設置場所を知っている生徒を増やさなければならない。
		②健康について関心を持たせ、疾病異常の早期発見のため、健康診断の受診や事後措置の徹底を図る。 (保健環境)	健康診断受診率が100%であった。 健康診断受診率が95%以上であった。 健康診断受診率が90%以上であった。 健康診断受診率が90%未満であった。	A	全員が健康診断を受診した。			
		③生活習慣に関する調査を実施し、活用する。 (保健環境)	調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が80%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が70%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%未満であった。	A	アレルギーや既往症について共通理解を図った。			
		④保健だよりやホームルームでの啓発等あらゆる機会を捉えてAEDの設置場所について周知を図る。 (保健環境)	AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が80%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が70%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%未満であった。	D	設置場所の周知方法を改善する必要がある。			
②校内美化に努め、情操豊かな学校環境づくりに努める。	①毎日の清掃や大掃除を積極的に行わせ、学習環境を自ら整えさせる。 (保健環境)	意欲的に清掃に取り組んだ生徒が80%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が70%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%未満であった。	A	清掃活動に積極的に取り組む生徒は多い。	B	清掃に対しての意識は高い。しかし、一部の生徒は清掃に積極的ではなく、ゴミの分別ができていない場合も多少ではあるが見受けられる。	ゴミのポイ捨てをなくし、清潔な環境作りを目指す。ゴミの分別やゴミ箱の設置場所などを改善し、きれいな環境作りに努める。	
	②ホームルームにおいてゴミの分別(新学校版環境ISO)に対する意識の高揚を図る。 (保健環境)	ゴミの分別ができていない生徒が90%以上であった。 ゴミの分別ができていない生徒が80%以上であった。 ゴミの分別ができていない生徒が70%以上であった。 ゴミの分別ができていない生徒が70%未満であった。	A	ゴミの分別はよくできている。				
	③ゴミ処理の意識の高揚を図る。 (保健環境)	校内でゴミのポイ捨てが無く、ゴミ箱に捨てられ、余計なゴミの持込も無い。 校内でゴミのポイ捨てが少なく、ゴミ箱に捨てられ、余計なゴミの持込も少ない。 校内でゴミのポイ捨てがあり、余計なゴミの持込もやや多い。 校内でゴミのポイ捨てが多く、余計なゴミの持込も多い。	B	多くの生徒がゴミ箱を活用できるが、ポイ捨ては多少見受けられる。				
③防災・減災教育を推進し、地域防災の即戦力および将来の担い手を育成する。	①防災訓練を実施し、防災拠点としての役割を正しく認識している。 (保健環境)	全教職員の80%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の70%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の60%以上が防災体制が確立していると感じている。 防災体制が確立していると感じている教職員が60%未満であった。	A	防災体制が確立されていると考える教職は非常に多い。	A	生徒は防災に対しての意識を高く持っている。南海トラフの被害を受ける想定となっているので避難経路や方法を身につけようとする心構えを持っている。	今以上に防災に対する意識を向上させるとともに、防災施設の周知や災害時の人権意識等も高める必要がある。	
	②防災教育や防災計画を通して、防災準備(避難グッズや経路の確認)率を高める。 (保健環境)	防災準備が整った生徒が80%以上であった。 防災準備が整った生徒が70%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%未満であった。	A	多くの生徒が防災に対しての意識を持っているため、日頃から準備を整えている。				

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
3 特別活動の推進	①ホームルーム活動・生徒会活動や学校行事を活性化させ、自主性や実践的な態度を育成する。	①生徒会を中心としたあいさつ運動や清掃奉仕活動等が毎月計画的に企画・運営され、多くの生徒が活動に参加するように支援する。(特別活動)	生徒会や専門委員会が中心となり企画運営ができ、毎月実施した。生徒会や専門委員会の一部の生徒で実施した。実施はしたが、不定期であった。実施しなかった。	A	あいさつ運動においては計画に沿って毎月実施し、生徒会が積極的に運営することができた。	A	あいさつの励行や清掃奉仕活動などでは部活動の生徒が積極的に取り組んでいた。また競技力、実績共に向上した部が多く、学校の活性化に繋がった。学校行事においては、81.3%の生徒が「楽しく参加できた」または「達成感が得られた」と感じており、更に生徒が意欲的に活動できる環境を整えた。	各専門委員会の活動の活性化を図るため、役員の選定方法などを見直す必要がある。
		②生徒会を中心とした生徒主体の球技大会・学校祭が企画・運営されるように支援する。(特別活動)	生徒会が中心となり、自発的に企画運営でき、各行事が円滑に行われた。生徒会が中心となり、各行事を実施できた。生徒会が中心となり企画したがあまり協力を得られず運営が円滑ではなかった。生徒会や専門委員会が機能しなかった。	A	学校行事の一部に関しては生徒会が自発的に企画を提案し、運営する場面も見受けられた。計画・運営においては教員始動ではあるが、生徒会が中心となって実施した。			
		③学校行事において、個人の個性が活かされ、積極的にできるように支援する。(特別活動)	一人一人の個性が十分に発揮された。一人一人の個性がおおむね発揮された。一部の生徒のみの活動であった。生徒の個性が発揮されず、活気が感じられなかった。	A	クラスや各種委員会での役割を分担したり、文化的・体育的な活動の場を増やすことで、生徒一人一人の個性が発揮されていた。			
		④専門委員会活動の活性化を図るため、各専門委員会の役割を明確にし責任を果たせるように支援する。(特別活動)	70%以上の生徒が役割を自覚し、その責任を果たせた。60%以上の生徒が役割を自覚し、その責任はおおむね果たせた。役割は自覚していたが、あまりその責任を果たすことができなかった。役割の自覚が十分でなく、その責任を果たせなかった。	B	役割を自覚し、その責任をおおむね果たせた生徒が69.6%であった。昨年より1.6%増加した。			
	②部活動を推進し、スポーツ活動において質の高い専門教育を行い、競技力の向上とトップアスリートの育成を図るとともに、競技スポーツの発展に寄与する人材を育成する。	①部活動の意義について理解し、計画的に実施し生徒の自主的・自発的活動を支援する。(特別活動)	部活動の年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができた。年間計画に沿った活動がほぼできたが、目標の達成には及ばなかった。年間計画通りの活動があまりできず、目標の見直しの必要性を感じた。年間計画に沿った活動ができず、各部の方針や目標を達成することができなかった。	A	51.7%の部活動が年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができたと答えている。(生徒指数68.2%)	A		部活動の登録者数は8割を超えるが、活動をしていない生徒も多く、登録方法や意欲の低い生徒の指導について検討していきたい。
		②部活動を推進するため、関係機関との連携や、指導方法について工夫し、専門性を高め競技力の向上を図る。(特別活動)	昨年度実績より競技力が向上した。昨年度実績とほぼ同等の競技力であった。昨年度実績よりやや競技力が低下した。昨年度実績より大幅に競技力が低下した。	A	「昨年度よりも競技力が向上した」、あるいは「昨年度と同等の競技力であった」と体育部顧問69%の指導者が答えている。			
	③ボランティア活動を積極的に行い、地域への愛着と誇りを育み持続可能な社会の担い手を育成する。	①自分自身の生活する学校や地域社会において起こる課題の解決に対して、自分自身が自発的・主体的にその問題を解決していこうとする。(特別活動)	ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加し、継続できた。ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加した。積極的ではなかったが、周りがやっていたので活動には参加した。ボランティア活動は何もしなかった。	C	学校の内外でのボランティア活動について広報するとともに、生徒の活動を盛り上げた。ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加した生徒が28.9%であった。授業では講演会を通して地域社会への親しみや世界の文化の理解を進めた。また、インターアクト部は校内草抜き、学校周辺～撫養駅まで清掃活動、県高校青少年赤十字協議会秋季学習会参加、赤い羽根共同募金活動等積極的に行うことができた。	B	積極的に地域に対し、ボランティアをしようとする生徒がいると同時に生徒に対するアンケートでは「あまり興味がなく参加しなかった」という関心のない生徒が40.7%と多かった。	自分自身の所属する学校や地域社会に対して愛着を持ち、問題解決をしていこうという態度を生徒に持たせるために、学校行事、生徒総会、清掃活動などを充実させていく。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
4 学習指導の充実	①基礎的・基本的な事項の指導を徹底し、基礎学力の向上定着を図る。	①生徒が理解しやすいように配慮した授業をする。(教務)	生徒の85%以上が授業が分かると感じている。 生徒の75%以上が授業が分かると感じている。 生徒の65%以上が授業が分かると感じている。 生徒の65%未満が授業が分かると感じている。	A	ほとんど理解できているが42.3%、半分ぐらいは理解できている52.1%で93.3%の生徒は理解できている。	B	日常的にClassiやタブレットといったICTが活用されるようになってきている。今後もアクティブラーニングの推進が必要である。	研修等を通じて、電子黒板やタブレット等のICT活用を一層推進し、効果的な学習指導や表現力の育成に努める。(授業理解)
		②定期考査に向けて学習計画を立てて考査に臨ませる。(進路指導)	学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%以上であった。 学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%以上であった。 学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%未満であった。 学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%未満であった。	C	学習計画を立てた生徒は37.3%、計画の有無にかかわらず十分に勉強できた生徒は44.5%であった。計画、勉強共にできた生徒は14.4%にとどまっている。		見通しを待って勉強していくことの大切さを様々な機会を捉えて認識させていく必要がある。	
		③始業チャイムを生徒とともに聞く。(教務)	毎授業チャイムを教室で聞いた教員が80%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が70%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が60%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が60%未満であった。	A	「毎回聞いている」と「ほとんど聞いている」をあわせて、96.6%の教員が始業のチャイムを生徒とともに聞いている。		使用教室の配置等を考慮し、スムーズな授業開始につなげることができている。	
		④各教科において、資格や検定受検を積極的に薦め、指導・支援する。(進路指導)	検定の基本級合格率が55%以上であった。 検定の基本級合格率が50%以上であった。 検定の基本級合格率が50%未満であったが、受験者数が増加した。 検定の基本級合格率が50%未満で、受験者数も減少した。	A	検定の基本総合合格率は59.6%であった。		目標値は達成できてはいるが、昨年度から10%下がっており、来年度の状況を注視したい。	
	②専門性の高い科目を含めた幅広い選択科目等を設定し、生徒一人ひとりの興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。	①個別の相談体制を充実させ、個々の生徒に応じた時間割の作成に努める。(教務)	生徒の90%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の80%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%未満が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。	A	90.5%の生徒が十分な相談体制で時間割を作成できたと感じている。	A	履修検討会議で個々の生徒について丁寧に検討している取り組みを継続するとともに、進路指導課とも協力し、進路希望と履修についてのリンクを強化する必要がある。	生徒への説明資料の充実やきめ細やかな相談体制の構築により、個々の生徒のニーズに対応していく。
		②生徒の個性・進路に合った科目選択をさせる。(教務)	生徒の時間割満足度が90%以上であった。 生徒の時間割満足度が80%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%未満であった。	A	90.2%の生徒が科目選択に満足している。			
	③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫改善を図る。	①学習週間・面接週間を設け、学習の習慣化を図り、面接を効果的に利用する。(教務)	生徒の90%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の80%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%未満が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。	C	76.9%の生徒が面接週間の取組が良かったと感じている。	B	具体的なテーマの設定等、面接週間について、進路指導課や生徒指導課と協調していく必要がある。	課題解決に必要な思考力・判断力・表現力等をはぐむために「主体的・対話的で深い学び」の視点からより一層、授業改善に取り組むことが必要である。
		②全員が学力向上に向けて個人目標を設定し、取り組みを推進する。(教頭)	育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の90%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の80%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。	A	生徒の主体的な深い学びに向けて、授業改善を行うとともに、ICTを積極的に活用し、生徒の授業理解の向上に取り組んだ。		新学習指導要領の円滑な実施やGIGAスクール構想の実現に向けて、積極的に教材研究や校内研修に取り組むことができた。	
		③教員相互間の授業見学および研究授業を実施し、指導方法向上を目指す。(学力向上)	教員の全員が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の90%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%未満しか指導方法向上に向けた取り組みを行えなかった。	A	教員の全員が相互授業参観や研究授業に参加したと答えた。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策	
5 進路指導の徹底	①生徒一人ひとりの学力や適性などを的確に把握し、個に応じたきめ細やかな指導を徹底する。	①面談を通じて生徒の学力・適性・個性を把握する。(進路指導)	面談を活用し、十分な生徒理解と、進路に対するアドバイスができた。面談を活用し、おおむね生徒理解ができた。面談を実施したが、満足のいく生徒理解ができなかった。面談を実施できなかった。	A	「役立った」が50.3%、「少し役立った」が40.8%との回答であった。(合計91.1%)	A	進路指導においてやはり面談は大きな役割を果たしているようである。複数回の面接を行うことで、生徒のモチベーションが維持され、進路希望の実現につながっていると思われる。	進路に関する情報の提供及び共有はより迅速に行う必要がある。また、担任や部活動の顧問との連携も欠かせない。資料についてはWebでの提供が増えているので、その利点を活用できるよう、検討を重ねていきたい。	
		②進路対策会議を実施する。(進路指導)	必要な情報を共有し、進路指導に十分活用することができた。必要な情報を共有することはできたが、十分活用することができなかった。必要と感じる情報を共有することができなかった。進路対策会議を実施しなかった。	A	「大変役立った」が51.7%、「少し役立った」が34.5%との回答であった。(合計86.2%)				
		③生徒一人一人の進路実現に向けての支援体制を拡充する。(進路指導)	支援体制について生徒の80%以上が満足した。支援体制について生徒の70%以上が満足した。支援体制について生徒の50%以上が満足した。支援体制について生徒の50%未満しか満足しなかった。	A	「そう思う」が63.6%、「少しはそう思う」が30.1%との回答であった。(合計93.7%)				
	②課題研究やガイダンスなどスポーツ科学科・総合学科の特性を考慮したキャリア教育を推進する。	①インターンシップ、大学・専門学校訪問を行い、事前事後の指導を充実させる。(企画)	参加生徒の80%以上が満足した。参加生徒の70%以上が満足した。参加生徒の50%以上が満足した。参加生徒の50%未満しか満足しなかった。	A	インターンシップを実施できなかったが、それに替えて進路別学習や面接指導を実施した。「次年度に大変活かせる」37.5%、「少し活かせる」50.0%であった。(合計87.5%)	A	昨年度に続き、今年度もインターンシップ、大学・専門学校訪問が実施できなかったが、その分進路別学習や面接指導、講演・出前講座等を充実させるよう工夫した。また、産社・総探・総学の内容や課題研究発表会には多くの生徒が満足しており成果が現れた。内容についてもとても勉強になったという回答が多かった。	次年度は方法を工夫してインターンシップや大学・専門学校訪問を実施できるよう検討したい。	
		②1年次総合学科における「産社」、2年次・3年次の「総探」「総学」の内容を充実させる。(企画)	生徒の80%以上が「産社」・「総探」・「総学」の授業に満足した。生徒の70%以上が「産社」・「総探」・「総学」の授業に満足した。生徒の50%以上が「産社」・「総探」・「総学」の授業に満足した。生徒の50%未満しか「産社」・「総探」・「総学」の授業に満足しなかった。	A	「授業内容が大変よかった」27.0%、「良かった」34.3%、「普通」24.3%との回答であった。(合計85.6%)				今年度も新型コロナウイルスの影響で多くの変更があったが、反省を次年度に活かし内容を再検討したい。
		③総学の「課題研究発表会」を充実させる。(企画)	生徒の80%以上が発表会に満足した。生徒の70%以上が発表会に満足した。生徒の50%以上が発表会に満足した。生徒の50%未満しか発表会に満足しなかった。	A	45.7%が「大変満足した」、51.4%が「満足した」と回答した。(合計97.1%)				年次団、企画課で協力し、発表内容や発表方法のさらなる工夫・改善をしたい。
		④スポーツ科学科の進路に対して大学等を含め情報提供に努める。(進路指導)	進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の80%以上が満足した。進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の70%以上が満足した。進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%以上が満足した。進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%未満しか満足しなかった。	A	「大変満足した」が48.6%、「満足した」が38.7%との回答であった。(合計87.3%)				8割以上の生徒が満足しており、継続的に実施したい。
	③進路設計や進路選択に必要な情報提供を組織的・計画的に行い、生徒一人ひとりの勤労観・職業観の育成を図る。	①進路講演会、講話、ホームルーム活動を通じて生徒の職業観・勤労観に努める。(進路指導)	進路情報の提供について、生徒の80%以上が満足した。進路情報の提供について、生徒の70%以上が満足した。進路情報の提供について、生徒の50%以上が満足した。進路情報の提供について、生徒の50%未満しか満足しなかった。	A	「役立った」が46.6%、「少し役立った」が42.8%との回答であった。(合計89.4%)	A	8割以上の生徒が満足しており、継続的に実施したい。	進路講演会、講話等を効果的に活用するために、事前事後の指導を工夫していきたい。「進路のしおり」についてはさらに改訂を加え、よりわかりやすいものとした。	
		②ホームルーム活動を含め、「進路のしおり」を活用する。(進路指導)	「進路のしおり」を利用した生徒が80%以上であった。「進路のしおり」を利用した生徒が70%以上であった。「進路のしおり」を利用した生徒が50%以上であった。「進路のしおり」を利用した生徒が50%未満であった。	A	3年次で「よく活用した」が57.3%、「少し活用した」が33.9%との回答であった。(合計91.2%)				

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
6 人権教育推進	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」総合的な学習の時間等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。(人権教育)	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」総合的な学習の時間等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。(人権教育)	各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が80%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が70%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が50%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が40%以上であった。	A	外部講師を招いての人権学習の視点を取り入れた授業展開を実施し、生徒の取り組みは大変良好であった。人権教育の満足度92.7%。	A	各教科における学習や「産業社会と人間」総合的な探求の時間において、人権尊重を根底に据えた学習指導が展開され、アンケートでは、「人権ホームルームに満足している」が89%だった。コロナ禍の中、生徒の評価は概ね良好な結果となっている。夏期休業中の課題にしている人権意見作文はほとんどの生徒が提出できた。そして、それを校内人権意見発表会につなげているが、発表者の人権問題に対する真摯な気持ちが聴取者に伝わり、人権意識の向上につなげることができた。放送による開催だったので3年次生も内容を共有できたことは大変有意義だった。教職員研修会等の人権に関する講演会は、川野操先生による「伝わるコミュニケーション ～頑張る以外の処方箋～」をご講演いただいた。コロナ禍におけるコミュニケーション不足と人間不信による人権侵害について、解決のヒントを学ぶことができた。人権HR授業や総合的な探求の時間などで生徒とともに学ぶことが出来た。事後の教職員アンケートで、人権教育の推進に「大変役立つ」が、41.4%、「役に立った」が58.6%を占めた。人権問題解消に向けた前向きな記述が多数あり、その成果がうかがわれた。	感染症防止対策を踏まえた中で、本校の特色(スポーツ科学科と総合学科や防災拠点校など)を生かした人権教育のあり方を考える必要があると思われる。生徒が自らの課題として人権問題をとらえ、主体的に取り組もうとする指導計画の充実をめざす。いじめなどの身近な差別事象に対して、対応できる態度を育てる。
		②人権学習ホームルーム活動を柱として、人権や命の大切さを根底に捉えた人権教育や道徳教育を推進する。(人権教育)	人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が70%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が60%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が50%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が40%以上であった。	A	生徒の主体性を重視した人権ホームルーム活動を目指し、各担任が指導計画の工夫に努めたことにより、生徒の評価は良好な結果が得られた。満足度89%			
		③人権意見作文や研修・講演会等の感想を書くことで、人権意識の向上を目指す。(人権教育)	全校生徒の90%以上が感想文を提出した。全校生徒の80%以上が感想文を提出した。全校生徒の70%以上が感想文を提出した。全校生徒の60%以上が感想文を提出した。	A	人権意見作文は殆どの生徒からの提出が得られた。また、7月に短編映画「バンドー村のコスモス」の視聴と地元への応援メッセージ文の作成を行った。12月の映画会は年次ごとの分散開催で実施した。10月の校内意見発表会は各教室で放送による読み上げで開催した。満足度89%			
	②地域や家庭と連携した人権教育を推進する。	①教職員間の人権意識向上を目指した研修会を実施する。(人権教育)	研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が80%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が70%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が60%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が50%以上であった。	A	「研修会が人権教育の向上に役立つ」が100%だった。今年度は講師を招いての講演会は実施できた。感染対策をした職員研修や学校行事等で有意義な活動はできた。	A	来年度は研修会や講演会が実施できるようになると思われるので、人権教育行事(人権HR、校内意見発表会、人権を考える日など)をさらに充実させて実施していきたい。次年度は犯罪被害者に対する差別やLGBTQIに対する差別、北朝鮮拉致問題について学ぶことにより、人権意識の向上につなげたい。	
		②鳴門市人権文化祭や県内各種人権問題の大会や研修会に積極的に参加する。(人権教育)	鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の60%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の50%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%未満であった。	A	コロナ禍のため各種の人権大会や行事にはできる限り多数の教職員が参加できることをめざし、年度当初に参加計画を立てた。感染対策によりリモート開催や文書開催に変わったが、積極的に参加できた。			
	③自主活動の活性化に努める。	①人権委員会、人権意見発表会、校内自主活動、「中・高生による人権交流集会」等への生徒の積極的参加を促す。(人権教育)	校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、60名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、50名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名未満であった。	B	校内人権問題意見発表会は、全年次が各教室で参加できるよう放送による配信で開催できた。すべてのクラスから発表者を得ることができ、生徒の参加状況は良好であった。短編映画視聴や地元への応援メッセージ文の作成を行った。社会問題研究部では各種企業における地域問題解決のための交流会に参加した。	B	人権委員会および社会問題研究部の活動の活性化に向けて、具体的な方策を明らかにする。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
7 読書活動の推進	①生徒の自主的な読書活動を推進する。	学級文庫の利用を促進する。(図書情報)	学級文庫を利用した生徒が50%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が30%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が20%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が20%未満であった。	A	53.6%の生徒が利用していた。	A	コロナ禍でも安心して図書館に入館できるように図書除菌機が設置された。さらに『絵本の読み聞かせ』や『読書会』の開催、その他授業等での図書館利用などで、入館者数は横ばいであったが、貸出冊数および1人当たり貸出冊数、また1人当たり入館回数は、少しだが増加した。	「朝の読書週間」や「読書会」などの行事の工夫と機会の拡大で、自主的な読書活動ができるようにしたい。
		読書感想文(夏休み課題)の提出を促す。(図書情報)	読書感想文の提出が80%以上であった。 読書感想文の提出が70%以上であった。 読書感想文の提出が60%以上であった。 読書感想文の提出が60%未満であった。	A	100%で全員が提出した。			
	②新聞を活用した学習活動を推進する。	ホームルーム活動等で、新聞を活用する。(図書情報)	新聞を活用したホームルームが50%以上であった。 新聞を活用したホームルームが30%以上であった。 新聞を活用したホームルームが20%以上であった。 新聞を活用したホームルームが20%未満であった。	B	ホームルーム担任による活用は34.5%であった。	B	様々な学校生活のシーンで、新聞が身近になるようにする。特に図書委員による新聞切り抜きの掲示をより工夫したい。	
		授業で新聞を活用する。(図書情報)	新聞を活用した授業者が50%以上であった。 新聞を活用した授業者が30%以上であった。 新聞を活用した授業者が20%以上であった。 新聞を活用した授業者が20%未満であった。	B	教科担任による活用は、48.3%であった。			
	③学校図書館の活用を促進する。	図書館の入館者の数を増やす。(図書情報)	入館者数が5%以上増えた。 入館者数が増えた。 入館者数が増えなかった。 入館者数が5%以上減った。	C	入館者数は、昨年度とほぼ同数であった。	C	図書館が利用し易くなる環境づくりや工夫した行事を設けて、生徒の入館する機会が増えるようにする。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方針
8 開かれた学校づくりの推進	①公開授業,中学生体験入学などの教育活動の公開を推進する。	①公開授業を年間2回以上実施する。(企画)	年間2回以上実施し,前年度に比べて参加者の割合が100%以上であった。年間2回以上実施し,前年度に比べて参加者の割合が100%未満であった。年間2回以上実施し,前年度に比べて参加者の割合が80%未満であった。年間2回以上実施し,前年度に比べて参加者の割合が70%未満であった。	D	PTA総会が実施されなかったため,公開授業は1回行った。参加者は昨年度と比べて3分の1に減った。	D	公開授業は1回のみとなったが,今年度は1日のみの公開にし,普段の授業と専攻実技と両方見ることができるよう設定した。普段の授業の様子を見たいという保護者の方が参加してくださった。また中学生体験入学は,授業および部活動見学のオープンスクールという形での実施となったが,多くの参加があった。	公開授業に参加する保護者が昨年に比べて減少した。日を1日に設定したためか,次年度検討が必要である。  コロナ禍前に実施していた体験入学を次年度は実施するのか検討が必要である。
		②中学生体験入学での授業内容を充実させる。(企画)	体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が90%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が80%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が70%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が70%未満であった。	D	今年度も,新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から,日程等大幅に短縮・変更し,体験授業を実施することができなかった。11月に中学生対象のオープンスクールを実施した。			
		③学校祭を保護者や中高生・地域の方に開放する。(特別活動)	今年度訪問者数が300人以上であった。今年度訪問者数が200人以上であった。今年度訪問者数が150人以上であった。今年度訪問者数が150人未満であった。	D	渦高祭においては今年度,新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から非公開としたため,中高生・地域の方に開放することができなかった。			
	②ホームページ等を利用して迅速な情報発信をする。	メール配信システムなどICT活用を推進する。(図書情報)	ICTを活用した連絡方法は便利だと感じている生徒が80%以上であった。ICTを活用した連絡方法は便利だと感じている生徒が60%以上であった。ICTを活用した連絡方法は便利だと感じている生徒が40%未満であった。	A	生徒の94.2%が便利だと感じている。	A	保護者は93.6%がICTによる連絡方法を便利と感じている。またホームページのアクセス数は前年比の3.8倍で,保護者のうち77.7%がアクセス経験があった。さらに電子黒板・タブレットによる授業は74.4%の生徒がわかりやすいと回答しており,学校生活や学習活動のいずれでも,本校のICT機器の利活用が充実してきたと思われる。	メール配信の利便性が継続して生かされるようにする。またホームページのアクセスは,本校への進学を考えている中学生やその関係者も多数いると考えられるため,常に新鮮な記事にしたい。
		ホームページの内容を適宜更新し,充実を図る。(図書情報)	ホームページアクセス数が月平均10000件以上であった。ホームページアクセス数が月平均5000件以上であった。ホームページアクセス数が月平均3000件以上であった。ホームページアクセス数が月平均3000件未満であった。	A	常に10,000件以上のアクセスがあった。			
	③地域・PTA・同窓会等との情報の共有や連携を円滑にするシステムを構築するとともに,地域の人材の活用を推進する。	①PTA総会の参加者を増加させる。(総務)	参加者が150名以上であった。参加者が120名以上であった。参加者が100名以上であった。参加者が100名未満であった。					
②PTA研修を充実させ満足度を上げる。(総務)		参加者の満足度、A・B評価が80%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が50%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が30%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が30%未満であった。						



重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
9 グ ロー バル 教 育	①郷土の伝統・文化について理解を深める教育を推進する。	①「産業社会と人間」を通して徳島県や鳴門市の自然・歴史・文化・産業の素晴らしさを認識させる。 (総合学科)	郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が70%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が60%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A	郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が75%あった。	A	講演や現地体験調査・研究などを通じ、より深く郷土について理解することができた。	「産業社会と人間」を通じて学んだことを、実際の社会と重ね合わせて見ることで、より深い理解を追究していく。
		②インターンシップや「総学」の時間を通じ、地元へ根付き、貢献している産業・文化・歴史についての理解を深めさせる。 (総合学科)	地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が70%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が60%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A	地元の産業・企業の活躍を誇りに思い、地元企業に就職し、地元へ貢献したいというが70%以上であった。	A	地元の産業・企業の活躍を誇りに思う気持ちを高め、愛着を醸成できた。	インターンシップの実施に向けて、準備を進めていきたい。
	②異文化理解学習を通じて共生の精神の涵養を図る。	①授業等の教育活動を通して、海外の習慣や文化に触れ、日本の文化との共通点や相違点についての理解を深めさせる。 (国際交流)	世界には多様な文化があることを理解した生徒が70%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が60%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%未満であった。	A	「十分理解できた」と回答した生徒が27%、「少し理解できた」と回答した生徒が52.4%で、合計79.4%であった。	B	各教科におけるICTを活用した授業を通じ、海外の風景や文化に触れる機会を多く持つことで理解を深めることができた。異文化に伝えることをテーマに、本校生徒が台湾新竹市立成徳高級中学を訪問する予定となっている。台湾交流については、姉妹校提携を周知するための事前学習を継続していくことで、生徒の興味関心の向上を図る。	今年度もコロナウイルス感染拡大防止のため、本校生徒の台湾訪問が延期になった。交流再開時には、日本の伝統文化を伝えることをテーマに、本校生徒が台湾新竹市立成徳高級中学を訪問する予定となっている。台湾交流については、姉妹校提携を周知するための事前学習を継続していくことで、生徒の興味関心の向上を図る。
		③ALTの先生などとの交流を通して、異文化を尊重し、自国の文化を誇りに思い、共生していく姿勢を培う。 (国際交流)	異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が70%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が60%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が50%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が50%未満であった。	A	「よくできた」と回答した生徒が33.1%、「できた」と回答した生徒が50.3%で、合計83.4%であった。			
③スポーツ等を通じた国際交流を推進する。	③台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行う。 (国際交流)	台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が70%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が60%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が50%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が50%未満であった。	D	コロナ禍にあって国際交流は実質的に困難であった。	D	行政機関と連携し学校全体で取り組む計画を立案する必要がある。	アフターコロナ後の計画を策定していく必要がある。	
		①競技を通して海外の学生と交流する機会を設ける。 (スポーツ科学科)	国際大会や交流会等に参加する機会を設け、競技を通じた国際交流に積極的に取り組んだ。 国際大会や交流会等に参加する機会を設け、競技を通じた国際交流に取り組んだ。 国際大会や交流会等に参加する機会を設けたが、競技を通じた国際交流に取り組めなかった。 国際大会や交流会等に参加する機会を設けられなかった。	D				コロナ禍にあって国際交流は実質的に困難であった。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
10 学校運営体制の充実	①教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。	①学校活動の様々な機会をとらえて、効果的な研修の機会を設ける。	年間を通じて8回以上研修の機会を設けた。 年間を通じて6回以上研修の機会を設けた。 年間を通じて5回以上研修の機会を設けた。 年間を通じて研修の機会が5回未満にとどまった。	A	各学期始めや終わりの職員会議において全体研修会を開催するとともに、職員朝礼において時機を捉えた注意喚起やJoruri回覧板を利用した研修を行うことができた。	A	日常的な研修・定期的な研修を実施するとともに、毎月5日をコンプライアンスの日を設定し、回覧板を利用した研修を取り入れ職員の意見を共有することで意識が高まった。	コンプライアンス意識の高まりを継続さらに高めるため、外部講師を招聘するなど、様々な視点からの研修を取り入れ、研修の質を高めていく。
		②研修の内容を精選し、受講する教職員の理解度を高める。	全教職員の90%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の80%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の70%以上が理解度が高まったと考えている。 理解度が高まったと考える教職員が70%未満にとどまっている。	A	研修によって、コンプライアンスに対する理解が深まったと思う職員は93.1%であった。			
	②危機管理態勢の徹底を図る。	①安全教育・防災教育をはじめ危機管理に関する理解を深め、危機を予測し対応できる能力と体制を整える。	全教職員の85%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 全教職員の75%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 全教職員の65%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 安全教育・防災教育の知識・技術を身につけていると考えている職員が、全体の65%未満にとどまった。	A	心肺蘇生法講習会に参加し、アレルギーに関する知識とエビデンしようにの技術を習得できた職員が100%であった。	A	危機管理について、生徒の安全を守るためにアレルギーに関する研修を行い、エビデンの使用法を学ぶなど、より実践的な取り組みができた。	講習会を開催し積極的に参加し、防災や生徒の安全等、危機管理能力を高めていく必要がある。また、教職員間のコミュニケーションを密にすることにより、意識の共有を図り「風通しの良い職場」を推進する。
		②教職員間の日頃のコミュニケーションを密にするとともに、「風通しの良い職場環境作り」に配慮し、創造的な意見を出しやすい環境を整える。	全教職員の85%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の75%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の65%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 「風通しの良い職場」であると考えている職員が、全体の65%未満にとどまった。	A	「風通しの良い職場」だと思う職員が89.7%であった。まためざすべき生徒像の職員共通理解の研修を継続した。			
	③学校価値の創造を推進する新規事業の創出、地域の人材づくり、国際交流等、新しい企画を推進するとともに、課題解決に向けた協働体制を確立する。	①地域に貢献できる人材の育成を期待できる事業創出する。(NEXT)	地域の事業に生徒が参加協力し、全体として共に運営する機会を造った。 地域の事業に生徒が参加協力する機会を造った。 生徒に地域の事業に関する広報を行った。 地域の事業に関する協力の依頼があった。	A	スタジアム学園祭に参加し、スポーツ科・総合科ともに科の特色を生かした取組ができた。年次全体で取り組む行事として、内外ともに効果的な取組となった。	A	新型コロナウイルス感染症の影響により、地域の事業に参画する機会は減少したが、商品開発やマーケティング調査等に取り組んだ。各分掌においてコロナ禍において実施可能な対応に取り組み、教育目標の達成に尽力した。	学校運営協議会の活用も含めて、教育課程に地域との協働を位置づけた活動を充実させる。また、地域の方々や学校の交流だけでなく地域と地域の方々をつなぐ企画へと発展させるとともに、制約がある中でも工夫を重ねて継続することが必要である。
		②各校務分掌の課長を中心に、本校の教育目標を理解し、その達成に向けた運営を行う。	課長を中心に教育目標の達成を意識した改善・充実が図られている。 教育目標を意識した改善・充実が図られているが、一部不十分な点がある。 不十分な点もあるが、一部で教育目標を意識した改善・充実が図られている。	A	課長を中心に教育目標の達成を意識した改善・充実が図られているとする職員と、図られているが、一部不十分な点があるとする職員を併せると96.6%であった。			
		③教職員が「地域に開かれた学校づくり」を意識した協働体制を図る。	協働体制による活動が円滑に実施された。 おおむね円滑に実施できたが、一部に不十分な点がみられた。 不十分な点も多々あったが、効果的な部分もみられた。	A	協働体制による活動が円滑に実施された、おおむね円滑に実施できたとする職員が併せて96.6%であった。効果的な部分もあったとする教員を合わせると100%であった。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
11 食育の 推進	①食育に対する知識 と理解を深め、健康増 進を図る。	①自身の食生活を振り返ることにより、栄 養バランスを意識して食生活を送ることが できる。(食育コーディネーター)	生徒の80%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができている。 生徒の70%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができている。 生徒の60%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができている。 生徒の60%未満が栄養バランスを意識した食生活を送ることができている。	B	73.2%の生徒が栄養バランスを意 識して食生活をおくることができ ている。	B	小・中学生の頃から食育について指 導を受けており、 多くの生徒が食生 活を意識して生活 をすることができ ている。しかし、 高校生活におい て、アルバイトや 情報通信機器の使 用などから生活リ ズムが乱れ食生活 にも影響している 生徒もいる。競技 力向上に食事が大 切な要素の一つで あることを理解で きており、補食に についても高い意 識を持っている。	食に関する意識は向上 している一方、毎日の 食生活に反映するこ とができている生徒が いる現状を踏まえ、生 活リズムの改善も含め 指導をしていく必要が ある。
		②料理コンテストに応募することにより、 食に関して興味・関心をもつ。(食育コ ーディネーター)	家庭科の授業において生徒の90%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の80%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の70%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の70%未満が料理コンテストに応募した。	B	家庭科の授業での課題として、料 理コンテストに81.3%の生徒が応募 した。			
	②食育を通じて競技 力の向上を図る。	①スポーツ栄養学について競技に応じて 管理栄養士の専門的な指導を受ける。(食育 コーディネーター、スポーツ科学科)	生徒の70%以上が競技に応じて専門的な栄養指導を受けた。 生徒の60%以上が競技に応じて専門的な栄養指導を受けた。 生徒の50%以上が競技に応じて専門的な栄養指導を受けた。 生徒の50%未満が競技に応じて専門的な栄養指導を受けた。	A	スポーツ科学科に在籍している生 徒において、各専攻実技ごとに分 かれて100%の生徒が競技に応じ た専門的な栄養指導を受けた。	A	競技力向上に向けて食 事・睡眠・休養をどのよ うに自己管理していくか、 実践に向けて各担当の 教員との連携して指導し ていく必要がある。	
		②競技力の向上のために補食を意識し て、間食に気を付けることができる。(食育 コーディネーター)	生徒の60%以上が間食に気を付けている。 生徒の50%以上が間食に気を付けている。 生徒の40%以上が間食に気を付けている。 生徒の40%未満が間食に気を付けている。	A	スポーツ科学科において80%の生 徒が間食の際、補食を意識するこ とができた。			